

## 労働環境の悪化は女性に打撃

新型コロナウイルスは、女性の就業にどのように影響を与えたのでしょうか。

総務省によると、緊急事態宣言が発令された令和2年4月の就業者数は88か月ぶりに減少しました。しかし、注目したいのは、その減少人数（前年同月比）に、男女差が生じていることです。男性が27万人減に対し、女性は53万人減※1と、女性への影響が大きかったのがわかります。

その理由の一つとして考えられるのは、新型コロナウイルスが影響を与えた業種は、女性が多く働いていたという点です。就業者数が大きく減っている宿泊・飲食サービス業で働く女性は男性の1.8倍、卸売業・小売業は男女ほぼ同数です。※2 加えて、パート・アルバイトなどの非正規職員・従業員として働く女性が多く、不安定な雇用環境にあることを考慮に入れなければなりません。役員を除く雇用者に占める非正規職員・従業員の割合は、男性は21%に対し、女性は53%と半数を超えています。※3

### ひとり親家庭への影響

就業状況の悪化は、ひとり親、特にシングルマザー世帯に特に深刻な影響を与えています。NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむが、4月に実施した調査によると、半数を超える54.4%が「収入は減る」「収入がなくなる」と回答しました。政府や自治体への要望として「すぐに現金給付が欲しい」と回答した人は、全体の78.1%を占めています。※4

また同団体が、食料支援の申込者を対象に行なった6月の調査では、回答者の7割以上で、収入が減少しており、なかには、節約のために食事を一日一食に減らしたケースもありました。※5

## 自然災害は誰にとっても起こりうる

清瀬みんなの防災ネット、十小・五中避難所運営協議会

石崎 勇仁さん



月1回メンバーが集まり防災に関する情報交換をしています。昨年は、アイレックを中心に災害時での簡易トイレの実演とPRを行いました。「コロナ対策と避難所について」として、行政と共に出前講座も予定しています。

コロナ禍であっても、風水害の心配はあるわけです。7月4日深夜から九州地方を襲った水害では多くの犠牲者が出ました。新型コロナウイルス感染を気にしながらの避難は不安が増しています。また他県のボランティア支援を断っており、瓦礫の片付けも進まないと聞きました。

身近な例では、今年6月6日に清瀬市で局所豪雨が一部道路が冠水しました。雨がさらに続けば、「三密」を避けて避難しなければならなくなります。人ごとでなく、誰もが被災者になりうるということですね。

今、市内を11校区に分け「避難所運営協議会」を立ち上げています。各校区の特性に合わせた、きめ細かなつながりを目指しています。今後の活動としては、池袋から清瀬まで歩くツアーを予定しています。歩くことで、様々な気づきがあると期待しています。（山口）

## これからも、子ども食堂の輪を広げたい

おひさまネットワーク

代表 福本 麻紀さん



子ども食堂は、おやつ作りや遊びの時間、食事の提供などを通して、主に小学生や中学生の居場所作りを行っています。市内に15ヶ所、様々な背景を持つ子が集まります。

3月以降は通常活動を休止し、お弁当・お菓子の宅配を行っています。大学生ボランティアが行くと、話をしたくて待っている子がいて、保護者からは「お弁当は助かる」「子どもを早く外に出してあげたい」と言われました。

コロナ禍で、支援を必要とする子のために、行政と連携が取れるようになりました。また、市内の各団体が食堂をお弁当の配布に切り替え、活動日を増やして努力しています。ですが、子どもの異変に気付くには足りません。子ども食堂が、自治会単位で一つは欲しいです。

子ども食堂を通じて、子どもが社会に対する信頼を作るきっかけになったら、と思い活動を続けています。社会を信頼できたら親になった時、誰かに相談ができるからです。この活動が、虐待の連鎖を防ぐ一助となればとも願っています。（中嶋）

## 家庭内の役割が女性の負担に

家庭内での役割分担についても問題が浮上しました。ステイホーム宣言が出されてから、最も慌てふためいたのは保護者（特に母親）ではないでしょうか。

首相の全国休校要請により、それまで日常で子どもたちを育む場として機能していた学校・幼・保育園が突然失われたわけです。多くの保護者が「三食分を用意するのが大変だった」とため息をつきました。

子育て期にある男性の家事・育児時間は、共働き夫婦が当たり前になった昨今でも、依然、短いまです。夫婦と小学生の子どものいる世帯の仕事がある日で、女性が1日当たりで3時間57分に対し、男性が1時間16分となっています。（内閣府 令和2年度 男女共同参画白書）テレワークの傍ら、休校になった子どもたちの課題を手伝うのも、幼児を寝かしつけるのも、結局は母親に偏ってしまった現実。会社からの配慮もない場合には、さらに負担は重くのしかかりました。家事や育児は、妻一人が抱えるものではなく、家族全員で役割分担をしていく必要があるのではないのでしょうか。（山崎）



僕たちは育児のモヤモヤをもっと語っていいと思う  
常見陽平著/自由国民社

1日平均約6時間、育児・家事に没頭する男性が、育児・家事や妊活・保活などのモヤモヤに向き合った本です。



男コピーライター、育児をとる。  
魚返洋平著/大和書房

会員の男性が6カ月の育児休業をとった体験談。「気分」に焦点を当てリアルな育児体験を語っています。